

立命館大学建設会

発行所
立命館大学建設会事務局
〒525-8577
滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学理工学部
環境都市系事務室内
平成 23 年 8 月

第25号

会長挨拶

建設会会長

川那部 隆二

昭和四十八年卒



昨年十月の建設会総会におきまして、会長を仰せつかりました川那部でございます。会員の皆さんには、平素より各地域・各界におきまして、建設会発展のためにご尽力をいただいておりますこと厚くお礼申し上げます。

さて、去る三月十一日に発生した、わが国観測史上最大である、マグニチュード九・〇という巨大地震と、この地震に伴う大津波、加えて福島第一原子力発電所の事故により、広範囲で、かつ多岐にわたる被害となり、まさに国難ともいえる大災害になってしまいました。この寄稿を書いております今、発災後三ヶ月あまりが経過しておりますが、あらためて、被害に遭われた皆様に深く哀悼の意を表しますとともに、いまもつて、避難所生活を余儀なくされている皆様に心からお見舞いを申し上げます。

地震発生以来、マスメディアを通して、連日この東日本大震災にか

かる報道がなされてはいますが、『想定外』という言葉がしばしば耳にたします。確かに今回の地震は広範囲であり、予想を超えていたという部分においては想定外であったかもしれませんが、この『想定外』について、土木技術者の一人として、いま一度見つめ直してみたいと思います。

震災復興とエネルギー需給解決に向け

環境都市学系 学系長

建築都市デザイン学科

近本 智行 教授



宮古市田老町民として苦々しく思っていることがあります。今回の津波で田老の防波堤が壊れた・役に立たなかったと、間違った報道がされています。先人が何十年もかかって築いた防波堤は壊れていません。

今年度、学系長を拝命しております建築都市デザイン学科の近本です。会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて二〇一二年より理工学部では学部・大学院のカリキュラム改革が行われます。同時に学科の再構築が実施され、電子システム系では電気電子工学科と電子情報工学科が統合して電気電子工学科となり、電子情報デザイン学科は電子情報工学科と変更されます。また機械システム系では機械工学科とマイクロ機械システム工学科が統合され機械工学科

環境都市系では学科体制は現状の三学科を維持しますが、建築都市デザイン学科に新たに実務設計者養成コースとして学部三回生から大学院までの一貫プログラムを開始します。教育や研究も、時代の要請に合わせた展開が必要となっているところですが、学系OBの皆様、および教職員の皆様のご指導ご鞭撻を頂きながら、精一杯務めさせて頂きます。さて学系の教員の異動ですが、昨年度末に環境システム工学科の教

防波堤が完成した当時、防波堤の外側（海側）に家を建ててはいけなかった、暗黙のルールがあったそうです。が、津波の記憶も薄れ、海側に土地を持つている人に「建てるな」と強く言えなくなり、あとから建設した新しい防波堤が、今回崩れた防波堤です。

田老の人的被害は、防波堤があるから大丈夫。私達人間の認識の甘さがまねいた結果です。しかし、高さ一〇mの防波堤に対して、高さ一五・二〇mの津波・水の壁が何度も襲ったのに、建物や壊れたのは防波堤から遠くても二〇〇mまでです。他の被災地と比べて津波の届く距離が短かったのは、この防波堤が壊れず、津波のパワーを吸収してくれたからです。（中略）

どうか、田老の防波堤が役にたたなかったといった、間違った報道を鵜呑みにして欲しくないで、このことを皆様に伝えて頂けないでしょうか？

以上、原文のままですが、一町民の方が簡潔に事実を伝えておられます。

我々が土木構造物を設計する場合に、いかなる外力を想定するかで、対応できる災害の規模も決まってくるわけですが、今回の津波に関して、高さが一五m、二〇mを想定していれば、被害はもっと軽減できたし、あるいは防げたかもしれません。

授・早川清先生が退職されました。早川先生（現在、立命館大学特任教授）は立命館大学大学院理工学研究科を修了され、立命館大学理工学部助手、助教、教授として、四十年の長きにわたり学生の教育と、専門の地盤工学、地震工学、地盤環境振動工学の研究に取り組んでこられました。紙面をお借りし、心よりお礼申し上げます。

一方、今年度、環境システム工学科に教授として橋本征二先生が着任されました。橋本先生は国立環境研究所で資源循環・廃棄物管理のシステム等に関する研究を進めてこられ、立命館大学において循環型社会構築の教育・研究をリード頂けるものと思えます。また、今年度から、都市システム工学科の准教授であったJCウエルズ先生が教授に昇格され、建築都市デザイン学科の教授・建山和由先生が環境システム工学科の所属となりました。

設計は高さ一〇mでしたが、そのことをもって、「今回の地震は観測史上最大の地震であり、一〇mを超える津波は想定外であった」というのは言い訳でしかありません。『想定外』は出来たけれど、設計時点において、そこまで外力を高めることが社会的に承認されていなかった」というのが正直な説明だと思えます。もともと、こうした言い方も、一部の結果のみから見る人にとっては、言い訳にしか聞こえないと思います。防災施設としては相当の減災効果を発揮しているのですが…

では、どんなに大きな災害に対しても、ハード整備で対応できるかと言え、それは当然不可能であり、一〇〇年に一度の災害を想定しても、明日には二〇〇年に一度の災害が起るかもしれない。田老町は、過去に何度も津波被害に遭われて、『津波防災の町宣言』をされるほど町民の津波に対する意識も高い町でした。なのになぜ人的被害が起ったのか？プログラムの「防波堤があるから大丈夫」という言葉がすべてを語っていると思います。自然は必ず想定を超える場合があることを認識し、そうした時には「まずは自分の命を守る、逃げる」事が大切な

次年度に向けては、二〇一一年度・二〇一二年度の新教員整備計画が策定されたことに合わせ、理工学部での教員の学科配置が検討され、環境都市系でも現在いくつかの人事が予定されているところです。

さて三月十一日の東日本大震災及び大津波により甚大な被害が発生しました。多くの犠牲者の皆様に、深い哀悼の意を表しますと共に、被災者の方々に心よりお見舞い申し上げます。

学系では、現在「立命館大学グローバルCOE「歴史都市を守る文化遺産防災学」推進拠点」として文化遺産とこれを取り巻く歴史都市を災害から守るための教育・研究が進められております。今回の震災でも教員・学生諸君が被災地を訪れ、被災した地域の復旧・復興、また被災した文化遺産に対する取組みが進められています。

更に震災後発生した原子力発電所の事故と共に、電力エネルギー需給の逼迫が発生しております。学系では、総長を委員長とする『立命館地球環境委員会』において電力使用抑制の要請に基づく対策の推進や、サステイナブルキャンパス実現に向けた活動が行われております。また『立命館サステイナビリティ学研究所（RCS）』、『琵琶湖Σ研究センター』、『エコ・テクノロジ研究センター』での活動の他、『琵琶湖で学ぶMOTTA IN A I共生学』での人材育成など、低炭素型社会構築に向けた研究・教育が進められております。

都市や建築、環境、エネルギーを対象とする環境都市系だからこそ、震災復興・エネルギーの需給解決に向け、学系OBの皆様、および教員の皆様、学生諸君の活躍の場は大きいと感じております。

私自身の反省ですが、ともすれば造るほうの人間として、造ったから安全・安心を強調することになりがちではなかったか？ソフト対策として「想定を超えた時にいかに行動するか」を伝えていくことも、人の命を守る土木技術者としての大きな責任であると、あらためて痛感した次第です。

とは申しませんが、我々土木技術者は人を守る安全・安心のコンクリートもたくさん打ってきました。今回の震災においても、命を守ったコンクリートは計り知れないほど数多くあります。『公共事業悪論』や『コンクリートから人へ』などのポピュリズムに迎合した、そして、災害の少ない平時の安寧を基準とした過度な事業仕分け等に左右されることなく、土木技術者としての誇りを持って、いままでも果たしてきた役割を見据え、そして、これから果たすべき役割をしっかりと主張すべきと考えております。

二十三年度の各支部での総会も開催されていること存じますが、同じ技術者として、年代を超えて会員同士が交流を深め、建設会の益々の発展にお力添えいただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

会員の声

高齢者事故に思う



福井県衣笠会会長
笠松忠夫
昭和三十七年卒

昭和三十七年三月に衣笠校舎を巣立って早や五十年近くが過ぎ去った。

同年四月に建設会社に入社し、定年後は関連会社に九年間勤務した後、現在は公民館長を拝命して五年目を元気に勤めている。

福井市内の公民館は、社会教育事業を実施する所であり、更に地域コミュニティ機能の保持活性化、地域おこし、防災防犯、市との連絡調整、地域に関する色々な話の受付場でもある。

特に福井市郊外の田園地帯の我が地区では少子高齢化の天津波が押し寄せ高齢化率は三二・五%と大変高く、又、小学校の全児童数は今春八十名を割った。

今、地区に求められる事は、地区の高齢者が常に健康な状態で働いていたが、三世代が住みやすいまちづくり、に貢献できる様、又、お互いが支え合って過ごせる社会を創り上げる事である。

この計画実現の為に、公民館では高齢者教育の他に、小学校とも協議して三世代教育に特に力を注いでいる。

所が、六月に入り福井県では梅雨時の大雨警報ならぬ、聞き慣れない【高齢者交通事故多発警報】が福井県警から発動された。現在、福井県下における交通事故による死亡事故が二十三件発生(当初目標の二倍)、その中で高齢者死亡事故が全体の七十四%を占める事が発表された。

地区では公民館長のあて職として警察署から、高齢者交通リーダーを任命され活動しています。関係地区の事故発生の度毎に、現場での警察との立会、緊急対策会議などの会議に出席し、地元に戻ってお年寄りの方とじっくり話をしていると色々な問題点が浮かび上がって来ます。

当地区での高齢者(六十五歳以上)の方が外出する時は軽トラ、自転車(三輪自転車を含む)を使用するのが普通ですが、中には家族の方から使用禁止でキーを取り上げられた方、息子さん(内緒でカギを隠した)にも関わらず本人は「鍵を失った」との事で、息子にも相談できずに自動車会社に相談に来る人もいるとの話を伺った事もあります。

特に問題になるのは一人住まいのお爺ちゃん、お婆ちゃん。少し健忘症、痴呆症の方が問題で、一見して正常に見える方でも安全教育をすれば、ハイ、解りましたと元氣良い返事を頂いても、講習を終え帰るときには、信号無視、道路の真ん中をフラフラと走って帰る方が見られる有様です。

現在、私の地区では後期高齢者(七十五歳以上)の方は全人口の二十%を占めています。今後ともどんどん増加の一途を辿ると思えます。不慮な事故は本人ばかりか、被災者に、又、家族、社会にも迷惑をかける事となります。お年寄りの話とは他人の話と違っていましたが、七十歳を超えてから此の話は【自分の事】と云う事に気が付きました。

卒業して四十四年、今思うこと



岐阜県支部副会長
大野英男
昭和四十二年卒

1. 横着を起こさず、お先にどうぞ！
2. 疲れた体、そして疲れた心で運転はしない。
3. 危険な行動を見たら、事故の恐ろしさを親切に教えてあげる。交通事故の無い安全、安心なまちづくりに頑張ってください！

今回岐阜県支部の野崎幹事(事務局)より建設会会報に載せる文書をお願いし、と言われ、他人事の様思っていたので困ってしまいました。が現況を書きます。

卒業してから四十四年、現役生活三十八年とアルバイト七年目、古希を間近かに迎え大病をする事もなく、又何是と趣味が有る訳でもなく、又折妻と道の駅、神社仏閣を巡りながら淡々と過ごして来た様に思え(妻には単身赴任等で大変迷惑を掛けました)これで良かったかな。しかし、今年三月十一日には東日本大震災があり、三ヶ月余り経つても現地では復旧復興がままならず心痛む毎日です。

現在は建設会社でアルバイトをしています。最近の建設業界の資材等の著しい発展を見ると戸惑い、感心すると共に昔の工法等が懐かしさを感じられます。景気低迷の中、会員の皆様には健康にご留意され更なるご活躍を期待しています。

さて、当岐阜県支部は平成十九年十月に誕生し四年目を迎え川嶋会長の下役員一同頑張っており今年も十月十四日に総会が開催される予定です。例年三十数名の方に



参加をしていただいています。最後に立命館大学建設会の益々のご発展と会員皆様のご健康をお祈り申し上げます。

建立会は、来年第四回の記念総会となります



建立会会長
大西 博
昭和五十二年卒

東日本大震災により被災された皆さまに、心からお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。復旧・復興に携わっておられる建設会会員の方々には本当にご苦労様でございます。

平成二十二年の一月より、大阪府の中尾恵昭様からの引継ぎを受けまして、建立会の会長をさせていただきます。昭和五十二年の卒業と同時に国土交通省近畿地方整備局(当時、建設局)にお世話になって以来、三十三年間、

道路行政一筋でやってまいりました。ご縁があつて、衣笠Cのある京都に一度、BKCの滋賀に二度勤務をさせていただくことがあり、この六月まで滋賀にいましたが、七月から大阪(整備局)に異動となりました。

少し道路の話させていただきます。私自身が昭和二十九年生まれであり、それが第一次道路整備五カ年計画のスタートの年でしたので、道路のために生まれてきた。など、勝手に思っていました。道路特定財源の一般財源化は私にとってその意味で大きなターニングポイントでした。確かに道路の整備状況は、現在と昭和二十九年では隔世の感があります。例えば、乗用車の台数は、昭和二十九年は、全国で数百台程度、現在は五八〇〇万台国民二人に一台、高速道路は昭和三十九年に始めて尼崎・粟東間が開通したので、昭和二十九年当時は〇km、現在は約九九〇〇kmとなっています。どこに行っても未舗装の道路はありません。しかし、この度の大震災でも明らかにりましたが、高速道路や広域道路が、大災害時の避難や支援にとつて、また、復興の経済活動にとつて、いかに大事な基盤であるかがご理解頂けたと思っております。高速道路で未だ計画の約七割、特に東南海・南海地震に留まらず大規模風水害などの災害への備え、即ちミッシングリンクの整備が急がれます。

建立会の総会は現在まで、三十九回を数えます。今年は一月二十二日に大阪市内のホテルにおいて一五〇名の方々に参加頂き大いに盛り上がりました。幹事会の活動は皆さんが熱心に参加していただき、六月頃より二ヶ月に一回程度集まっております。準備から受付・司会まで会員手作りの総会は、幹事会を立命館大学から早川清先生、建設会の川那部隆二会長、校友・父母課の田中稔課長、



建立会の歴代会長、事務局長にもお越し頂きました。ご挨拶でも申し上げておりますが、厳しい経済状況であるからこそ、総会だけにとどまらない同窓間の交流と意見の交換が会長としてお願いであり、建立会の理想です。来年の総会は、平成二十四年一月二十一日(土)に開催いたします。第四十回の記念の総会であり、今から幹事会で企画を進めており、立命の技術の輪が広がりますよう、多くの方々のご参加をお待ちいたしております。

北海道支部長に就任して



北海道支部支部長
千廣隆章
昭和五十三年卒

堀口前支部長からの突然の御指名により、昨年から北海道支部の支部長という大役を仰せつかりました。名簿を見ると昭和五十三年卒の支部長は見つからず、若輩者の私で務まるかと心配をしつつ、一年が過ぎようとした頃、会報の寄稿の話が来て、近況を書くことになりました。

平成二十二年九月二日の北海道支部総会には、土木学会全国大会で来道されていまして都市システム工学科教授の塚口博司様、助教の水田真紀様にお忙しい中、出席いただきありがとうございます。草津キャンパスの状況や恩師の尼崎先生・早川先生の話を聞かせて戴き、懐かしい思い出に浸ることが出来ました。ここに紙面を借りて、改めて塚口博司様、水田真紀様に御礼申し上げます。

平成二十二年十月十六日立命館大学建設会第十五回総会に議長として出席しました。支部長に就任して初めての総会で、議長という大役を仰せつかり、「避けることは出来ません。」と事務局から脅されどきどきしながら、京都に旅立ちました。北海道支部の議長経験者の成田先輩から総会の議事進行を教えて戴き、また総会出席者からの声援を受けて何とか無事に議事進行を終えることが出来ました。その後、児島孝之特命教授の講演会・懇親会に出席しました。ここでは、卒業研究の恩師であります小林敏士先生・昭和五十三年卒業の皆さんと話をすることで、大学生当時に戻ることが出来、楽しい時間を過ごさせて戴きました。

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災では、多くの尊い人命が失われ、東北地方を中心に未曾有の甚大な被害となりました。未だ多くの方が避難生活をされておられ、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

四月岩手県にお見舞いに行き、被害の状況を見て愕然としました。また、被災地の復旧復興が一向に進まない状況に苛立ちを感じたのは、私だけではないと思います。

被災地が一日も早く安全に復興するとともに、働く人々が仕事に働きがいを感じ、そのご家族が安心して暮らせる元気な地域にする必要があります。そのため、自然災害に強く・市民



岩手県山田町にて撮影

民が住みやすい街を作る建設業が欠かれません。建設会においては、「コンクリートから人へ」の建設公共投資不要論を吹き飛ばす必要があります。また、「国として一定の方針を掲げ、各自治体には詳細の対策を任せるなど、復興計画案を示すべきだ。」など一般社会に向けて判りやすく情報を発信する活動が大事だと思います。

大震災後、技術者として



福岡県支部 松尾龍也 平成六年卒

三月十一日に発生した「東日本大震災」は、三陸沿岸の岩手県、宮城県、福島県を中心に約一万五千人の方々の尊い命が奪われ、また福島県では第一原子力発電所に大きな被害をもたらす等、戦後最大、関東大震災に次ぐ未曾有の大災害となってしまいました。

亡くなられた方々に対しまして、心からご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に対しお見舞い申し上げます。五月中旬に岩手県の陸前高田市や宮城県の仙台空港・塩釜港などの被害状況の調査に行つて参りましたが、震災以来テレビで見ている光景が、まさに現実の世界で起きていました。人影のない瓦礫の山が累々と積もった町を目にして、無力感と逃げ出したい気分がいっぱいでした。

今回の大地震で再認識させられたことは、人が造つたものは自然の猛威の前では全くの無力であつたことです。今まで、政治家、行政、研究者など、多くの方々「安全・安心な社会の構築」という言葉を当たり前のように用いてきました。守るべき、確保すべき「安全」とは何だったでしょう。震災後、「想定外」という言葉が何度となく使用されてきましたが、今回の大災害を「想定外」ということで済ませて良いのでしょうか。

われわれが守るべき安全とは、「施設や構造物の安全性ではなく、人々のいのちと暮らしの安全」ではないか。と思います。「安全・安心」は、施設や構造物のみで確保することは、経済性の面から言っても難しいことは明らかです。そのためにも超過災害対策やリダンダンシーの視点によつて、「人の安全」は確保されるべきであつたと思います。「施設や構造物の限界を知り、その上で複数(多重)の対策を講じ人命を守る。」ことが大切であると思います。

過去の歴史を見ても、我が国は繰り返した大きな災害に遭つてきました。日本人の英知を結集してその都度、前よりも良くなるという形で再生してきました。今回の危機に対しても自然の驚異を侮ることなく謙虚に受け止めて、将来に対する万全の備えをした世界のどこにもない模範とすべき「町づくり」を進めていたいただきたい。また一日も早く東日本大震災の復

旧・復興がなされることを期待したいと思つています。私自身も技術者の一人としてこの大事業に何らかの形で携わつていきたいと思つています。

社会人もいいかもしれない



建立会 植西瑛菜 平成二十一年卒

若手の文章を会報に載せたい。とお話を頂き、何を書いたら良いのやら。

サンプルとして見せていただいた先輩方の文章が輝いて見えます。近況や抱負など思うところを書いてみようと思つています。

二十四時間が自分の時間として確保されていた楽しい四年間の大学生生活を終え、社会人になり三年が経ちました。

学生時代は本当に好きな事ばかり挑戦し、充実していて大学生は良かったなあ。と思つていた私ですが、近頃は社会人もなかなか捨てがたいと感じて来ています。

仕事内容は意匠設計ということ。世の中の規模の大きい建築に携わるものの、未だWCと階段とホテルの客室一つしか書いたことがなく、日々精進というところです。

しかし学生との大きな違いは何と言ってもお給料が入ること。今まで手が出なかつた商品に手が届いたり、親に何かプレゼントすることも可能で

会社には属することで様々な年齢層の方々とコミュニケーションを取る場面も増え、プライベートでの交流範囲も広がりました。ゼミの人達との飲み会、会社の人とのキャンプ、サークルの友人との旅行など、社会に出る事で幅が広がっていることを実感しています。

そして一番嬉しいイベントは周りの友人・先輩が結婚していくこと。本当に幸せそうな二人を祝福し、子供も生まれて子供の写真がネット上にアップされてかわいい親子姿を見る機会が増えました。今世間ではあまり良いニュースが流れてこない状況ではありますが、私の周りは結婚出産ラッシュでなんだかキラキラ。私たち世代の小さなキラキラが集まって世の中も良い方向に向かっていけばと願いつつ、自分も社会人としてキラキラを発信するべく張り切つて働いていきたいと思つています。(建築都市デザイン学科卒・及川研究室)

立命館大学での四十七年間を振り返って



立命館大学 名誉教授 早川 清

昭和三十三年四月に立命館大学理工学部土木工学科に入学しました。その後、大学院に進学し修了後に理工学部助手に採用されました。教育・研究には四十七年間もの長い間関わつてきましたので、ご指導申し上げた卒業生が四百四十九名、院生が三十七名、博士が八名になります。学部・大学院での経歴を加えますと、立命館との付き合いは四十七年になります。さらに現在も特任教授として赴任していますので、今後も立命館との付き合いが続くことになりました。自分自身の博士論文の作成には随分苦勞をしましたが、八名の博士を輩出することになるとは、想像していません

初めに衣笠六号館時代を振り返つてみたいと思つています。昭和三十三年は東京オリンピックが開

催された年です。授業をそつちのけで大学のTVでオリンピックを鑑賞しておりました。その頃の生協の素うどんが五円、私の初任給は四九二〇〇円でした。今の様に講義室や研究室には冷暖房装置の完備はなく、卒研室の暖房は石油ストーブでした。自分たちで石油を注いで暖を取っていました。ただし、夕方にはストーブを囲んでの団欒(コップ酒を酌み交わすもの)が頻繁にありましたので、学生さん達とのコミュニケーションは今よりも十分に図れていたとおもいます。電話の受話器は廊下に二台のみで、電話が鳴ると該当の先生を呼びに行くことも、助手の仕事の一部でした。私の三回生の時の学生実験は六号館の一階で行いましたが、それまでは木造のあばら屋で行われていました。

四回生での卒業研究は、島山直隆先生の土質卒研を希望しました。その理由は簡単で、子供時代から岩石の採取が趣味でありましたので、土と岩石は関係があるだろうと思つたからです。卒研のテーマは「地盤の常時微動」に関するもので、同級生であつた故早川史郎君の乗用車(その頃にはマイカーを持つていた学生は、ほとんどいませんでした)に機材を積み込んで、京都市内の学校のグラウンドで測定を行いました。

一九六八年には立命館大学にも学生紛争が起こりました。これが飛び火して、土木工学科の衛生卒研を廃止することに対して反対闘争が生じました。伝統ある立命土木が解体されるかもしれない大きな危機でした。この頃に理工学部長だった故明石先生のご自宅に教員が集い、夜を徹しての教育・研究の改革論議も度々開かれました。六号館へ全共闘が押し寄せて来るとの情報に計測機器を恒温室に隠し、徹夜で実験室に泊まつた経験もあります。今の教員・学生の皆さんには信じがたいことがあつた

のです。書きたいことは山ほどありますが、衣笠時代の思い出はこの辺でお開きです。

理工学部は一九九四年四月にBKキャンパスに移転しました。一九九五年一月には、阪神・淡路大震災が発生しました。激動の時代はまだまだ続きます。震災の復興中での多難な時に、ポルトアイランドや六甲アイランドでの深夜の常時微動調査も行いました。土木学会関西支部に設けられた震災調査委員会の地盤・基礎分科会の委員の仕事も佳境の頃、ミシガン大学に留学することになりました。地盤振動に関する研究論文を多く作成しましたが、それにもまして Woods 教授夫妻、Gray 教授夫婦との、妻を含めての小さな国際交流が図れたことは一番の誇りです。ミシガン滞在中には、生物学部教授の故伊熊先生と奥様、ご家族にも大変お世話になりました。今でもこの交流は続いています。

研究・教育の進展に関しては、大阪大学名誉教授、立命館大学客員教授の松井 保先生に大変お世話になりました。「交通機関を発生源とする地盤振動の軽減対策に関する研究」で博士学位を頂いたのも松井先生からでした。松井先生のご示唆で多くの国際会議にも参加しましたので、訪れた国は約三十カ国にもなりました。上述したように、これらの国々から岩石を採取してきておりますので、鉱物分析を楽しみたいと思っております。

特任教授になってから、新たに立命館守山高校の三年生の授業も担当しております。「理工ゼミナール」という科目で、女子が五名、男子が三名おります。このプログラムの目的は、彼らに立命館大学の理工学部(特に環境・都市系へ)へ進学希望するように仕向ける命題があります。そこで、「防災と環境」をキーワードとして授業を進めております。若い高校生

達との交流も新鮮な気持ちで取り組んでおります。

退職の時期が近づいて来ると、最終講義や研究室の引越して新しい生活をしておりましたが、ようやく防災システムリサーチセンターでの研究生活に慣れて参りました。退職記念の催しとして、記念講演会と祝賀会が六月二十五日(土)に京都タワーホテルで開催されます。今は、この準備で追い込みになってきております。

最近、地域の混声合唱団に加入しました。ほとんどがシニア世代の方で、私より年齢が上の方が多くおられますが、皆さん歌が好きで元気に歌っておられます。新しい知り合いが多くでき、楽しんでおります。十月には第九の発表会がありますので、練習に熱を入れております。

新しい研究会として、大阪大学の災害科学研究所に「地盤環境振動研究会」を立ち上げました。こちらの運営にも関わっておりますので、色々と多忙な毎日を送っております。



環境システム
工学部 教授
橋本 征二

震災におもう

都内某大学での打ち合わせが一段落ついた頃、あの揺れが来ました。これまでに経験したことのない大きな揺れで、会議室のテーブルの下に潜り込みました。正直、地震が来て机の下に隠れたというのは初めての経験でした。帰宅難民となり、都内知人宅で一晩を過ごさせていただきましたが、余震が何度も襲う中で、あの衝撃的な映像をテレビで見つめていました。翌日、一部開通した鉄道とバス

を使い、つくばに戻りました。自宅のドアを開けてみると、冷蔵庫が前方に飛び出し、食器棚は倒れ、本棚の書類や本はほとんど床に落ち、液晶テレビは仰向けになっていました。本当に足の踏み場もないほどでした。官舎の七階であったこともあると思います。相当に揺れたことが伺えました。電気とガスは通じていましたが断水してしまいました。

二週間後には立命館大学へ赴任するための引越しを控えていました。福島第二原発の爆発の様子を見ながら、週明けに職場(国立環境研究所)に出ました。職場は電気、水道、ガスすべて止まっております、何もできない状況でした。

一九九五年、阪神淡路大震災が起こった年、私は京都で卒論に取り組んでいました。建築物の解体廃棄物の発生原単位の調査で解体現場を回って、いました。地震があった阪神地域にも通いましたが、当時、阪急電車の窓から見える光景に平衡感覚を失い、長田地区の焼け野原に戦後の様子を重ね合わせたのを鮮明に覚えています。

廃棄物管理の分野で研究を行ってきた者の責務として、今回の膨大な震災廃棄物への対処に何らかの形で貢献していかなければならないと思っております。四月に環境システム工学科に着任し、どたばたと落ち着かない日々を過ごして参りましたが、六月下旬頃から少しずつ通常の生活感を取り戻してきました。今回の出来事は、様々な意味で日本のシステムに転換を迫っていると思います。環境都市学系が取り組まねばならない課題は多く、私が身を置く環境に関わる仕組み、政策についてもそうです。これから学生とともにこれらについて考え、学生の成長と本学・世の中の発展のために尽力して参りたいと思っております。よろしくご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

事務局より

お知らせ

■会員登録データ

立命館建設会会員の皆様の名簿を隔年発行しておりますが、そのもとになるデータベースは、皆様からのお申し出に応じて適宜更新しております。このデータベースは、年会報の送付、総会などの各種案内、また、各支部からの連絡、会費請求の事務などに利用しております。

今回送付いたしました年会報に同封されている「会員登録データ」文書上段に記載されているデータをご確認いただき、修正や変更がございましたら8月末日までに建設会事務局までご連絡下さい。

また、2010年12月発行の「平成22年度版会員名簿」は、会費を納入いただいている会員を対象に送付させていただきました。名簿ご希望の方は、同封の振込用紙にて2年分の会費(6,000円)を納入いただきますと、入金確認が出来次第名簿を送付させていただきます。

※なお、8月12日～21日まで、大学一斉休暇となります。
何とぞご了承下さい。

■建設会年会費ご納入のお願い

立命館大学建設会は皆様の年会費で運営されています。
2011年度会費のご納入をお願い致します。
(年会費：3,000円)。

また、会費ご納入につきましては「郵便局の自動振替システム」をご利用いただくこともできます。申込み手続きは簡単ですので、すでに多数の会員の方にご利用いただき好評をいただいております。お申込みの際には、取扱郵便局「草津若草郵便局(Tel: 077-567-4050 FAX: 077-567-4120)」へ申込書の送付依頼書(様式適宜・住所氏名を記載)をFAXにてお送り下さい。毎年10月1日に会員様の郵便貯金口座から年会費が自動引き落としされます(8月末以降のお申込みは、翌年10月1日からとなります)。詳細については、郵便局から送られてくる申込書に同封されます。

なお、銀行からのお振込も可能です(ゆうちょ銀行109(イチゼロキュー)支店、当座0000884)。お振込の際、氏名の前に10桁のお問合せ番号を必ずご記入下さい(振込手数料は申し訳ございませんが、ご負担願います)。

建設会事務局

〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1
立命館大学理工学部環境都市系事務室内(担当:山元)
TEL: 077-561-4911 FAX: 077-561-2667

http://www.ritsumeai.ac.jp/se/rv/ob.html
E-mail: kenstkai@st.ritsumeai.ac.jp ←メールアドレスが変わりました
会費払込郵便振替口座: 02 大阪 01080-1-884